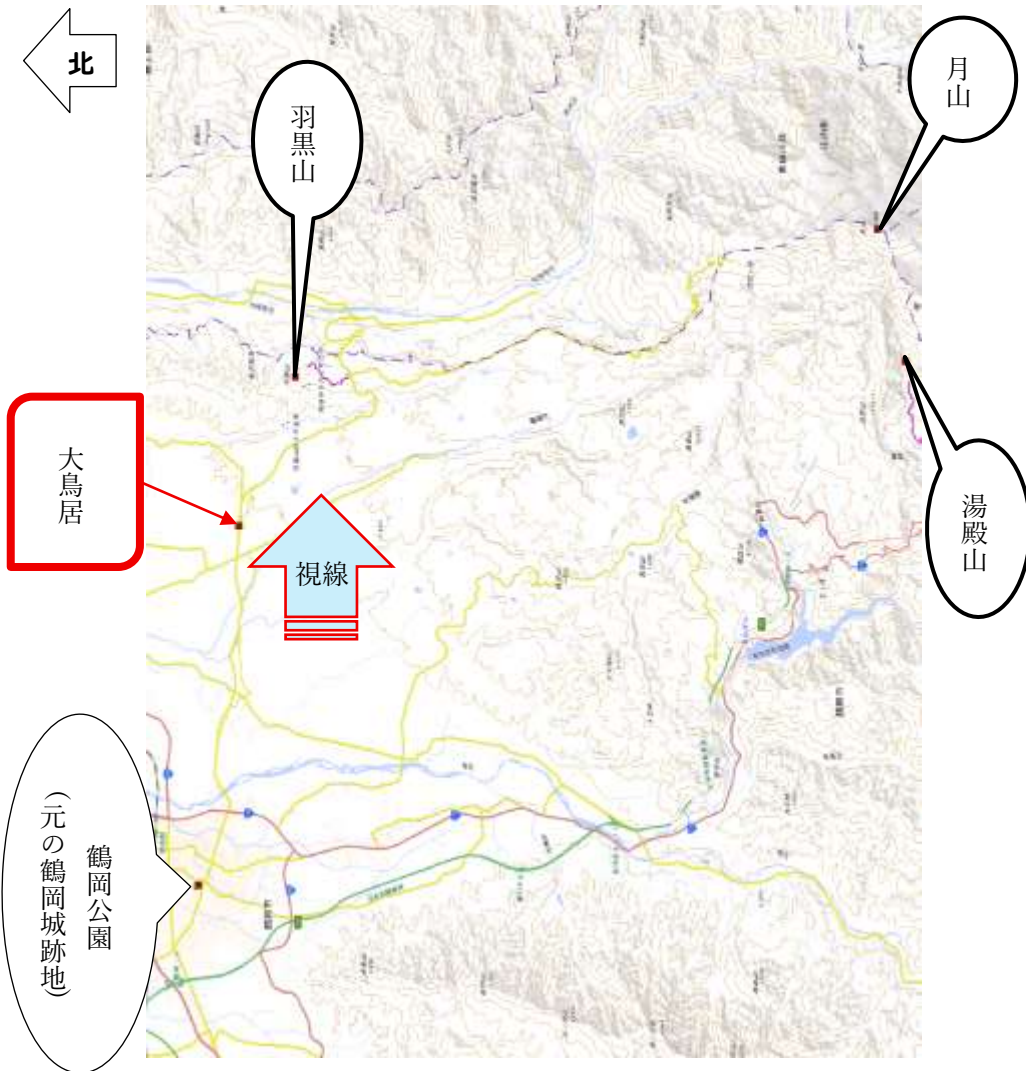


「出羽三山」 御山名称の配置を考察

そもその問題意識は・・・「羽黒山（出羽三山）」は、江戸時代を通して庄内藩主・酒井家が篤く崇敬した」という史実！ にも拘わらず、旧鶴岡城を背に（出立し）羽黒山大鳥居を潜る時の視界に入る出羽三山の地理的配置と、現在の「(宗)出羽三山神社」HP の配置が異なる。

それはなぜなのか？



下段において、出羽三山の神域に入る聖俗結界点から見た自然界の御山の並びと、冠している扁額記載における並びが異なるのはなぜなのか？

鶴岡市羽黒町の菅原功さん撮影

大鳥居から見た三山の地理的配置(デフォルメ)



羽黒山

月山

湯殿山

ところが、同じ方角から見た扁額内の配置は



月山
湯殿山
出羽
神社

羽黒山(＝出羽)と湯殿山の配置は逆！

下左図某石碑の三山配置は、「(宗) 出羽三山神社」のHP 三山配置と照合すると、羽黒山・湯殿山の位置が反対である（入れ替わっている）が、その理由（背景事情）は如何に？

某 出羽三山 碑
(前頁地理的配置と同じ)

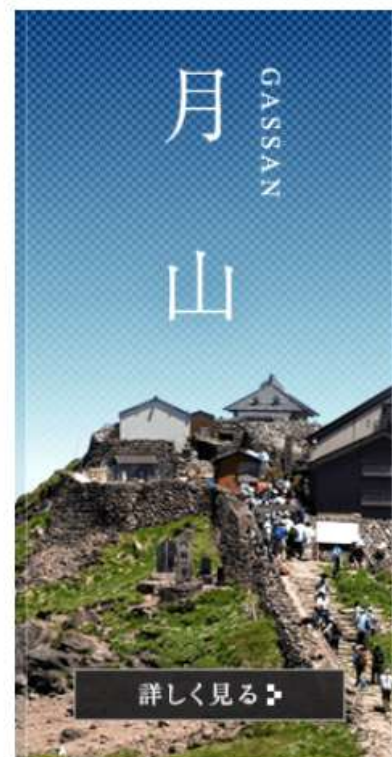
「(宗) 出羽三山神社」のHP 三山配置
(前頁扁額記載配置と同じ)



山の配置は民衆の信仰心?が濃い



詳しく見る ➡



詳しく見る ➡



詳しく見る ➡

山の配置は古神道初源（宗源神道）、記紀神話三貴子誕生物語由来を踏まえた学術的意図?が濃い

地元手向お土産品手ぬぐい 三山配置
「(宗) 出羽三山神社」のHP配置に一致



(後記の4・5頁も参照のこと)

「(宗) 出羽三山神社」HPの三山配置の考え方は、地理的三山配置を直線上にデフォルメ配置すれば、北から羽黒山、月山、湯殿山となり、①月山は中央位置であること。次に、羽黒山と湯殿山の比較検討をすれば、②羽黒山には三所(出羽三山)の神々を合祀した最重要施設の三神合祭殿を造営している実態を踏まえた施設面において羽黒山を優位とすること。「左右(陰陽)二元(二所)」に係る往古の思想においては、対称本体から見て左手を優位とすること、③すなわち、比較優位物を左手に配置すること。この3点に鑑みては、平面的には、本体から見て左側から羽黒山・月山・湯殿山となる。人間が出羽三山に向き合った場合は、逆に右側から羽黒山・月山・湯殿山として並べたということだろうと推察する。

一方で、江戸期までの石碑における多数はこのとおりで、湯殿山中心信仰の証左(一旦)



「湯殿山」単独碑

「湯殿山」中央配置三山碑

羽黒山



月山

近年（明治以降）の三山配置は以下のとおり				実際の地理上配置と、方角性配置	
「月山」中央配置の石碑				方角性	地理上の位置
石碑における山名配置	HPの配置と同じ		羽黒山 湯殿山	東側から三山を見れば (月山に向かって) 湯殿山 月山 羽黒山 太陽出る東を背に西面す	
	HPの配置とは違う		湯殿山 羽黒山	西側から三山を見れば (月山に向かって) 羽黒山 月山 湯殿山	
「羽黒山」を重要視した、もしくは、古神道依拠のHP配置に着目した視点を先行したが、下段写真、および冒頭左の写真においては、湯殿山をより重要視したもの見られる。どちらが正しいとか、適不適ではなく、信仰の重きや哲学的視点の置き方で、それぞれに意図が隠されているということだろう。					

【根拠的関連資料】「陰陽(左右)二元」対応の宇宙の両眼、太陽(日)と太陰(月)の配置思想は、吾が国記紀神話における三貴子誕生物語に由来し、「左上右下(左尊右卑)思想」となっており、古来(普通)の一般的な位置付けとなり、文化・しきたりに応用されて来た。

1) 背景

イザナギ・イザナミの国生み・神生みの後、イザナミは火の神カグツチを産んで死去
イザナギは妻を追って黄泉国へ行くが、腐敗した姿を見て逃げ帰る

2) 禊(みそぎ)

黄泉国の穢れを祓うため、イザナギは日向の橘小門の阿波岐原(川／真水・中ほど)で禊を行う
身体を洗い清める中で、多くの神々が生まれる

3) 三貴子の誕生

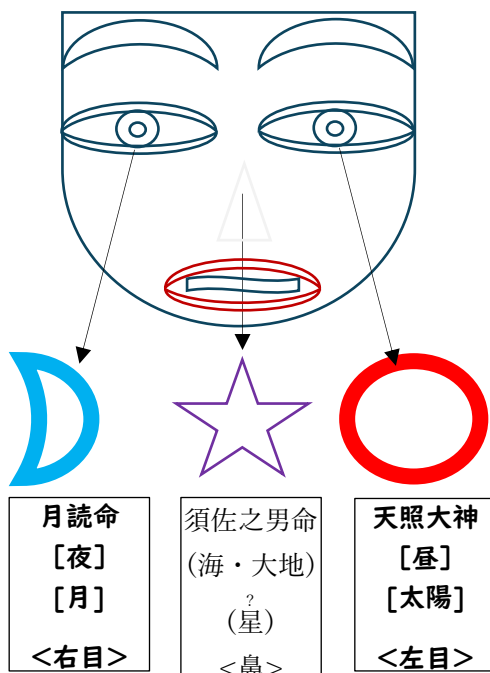
左目を洗う→天照大御神(アマテラス)誕生／太陽神、昼と天上界(高天原)の主宰神

右目を洗う→月読命(ツクヨミ)誕生／月の神、夜の支配者

鼻を洗う→須佐之男命(スサノオ)誕生／海原・嵐の神

記紀で
小差異

日本記紀の三貴子誕生



江戸時代の天皇(孝明天皇)の礼服袞衣

(蟾蜍と兎)月

日(三本足鳥)



薬師三尊

薬師如来を中尊とし、本体の
左脇侍に日光菩薩、右脇侍に月光菩薩



庚申信仰の掛け軸



「左上右下」思想におけるもう一つの初源「北辰信仰」

民俗学者の吉野裕子著「隠された神々（河出文庫）」等より

宗教学者の山折哲雄著「新・四国遍路」（PHP新書）等より

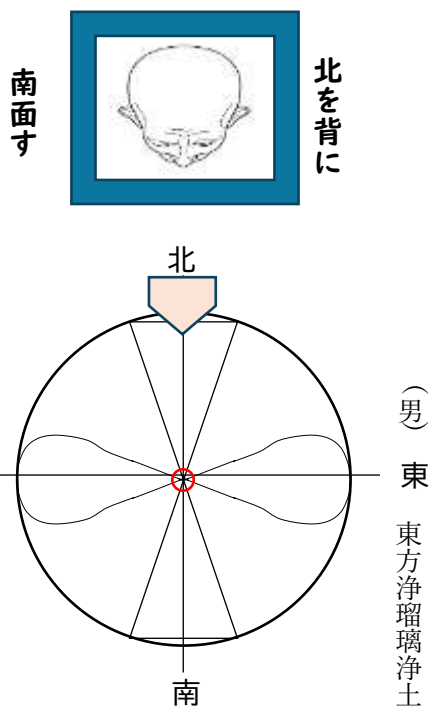
天中不動の星、北極星を中心とする部分（北斗七星を含めた所）を中宮と称し、特に北極星を神霊化して最高の天神「天帝・太極・太一・太子・天子」と称した。したがって、天帝太一というのは**北極星を背負って南を向き政治を行うのが一番良い（安定する）**とされて、南北・垂直軸が重要視されて来た。

日本は農耕社会ですから『太陽』と『月』の恵みを中心に世の中を考え、統治するという仕組みが出来ていた。そのため、**東西の軸**を大切にした。一方、中国大陸では、天帝（天使）というのは北極星を背負い、よって南を向いて政治をするとして、北極星を中心とした**南北の軸**に基づく世界観が優勢であった。

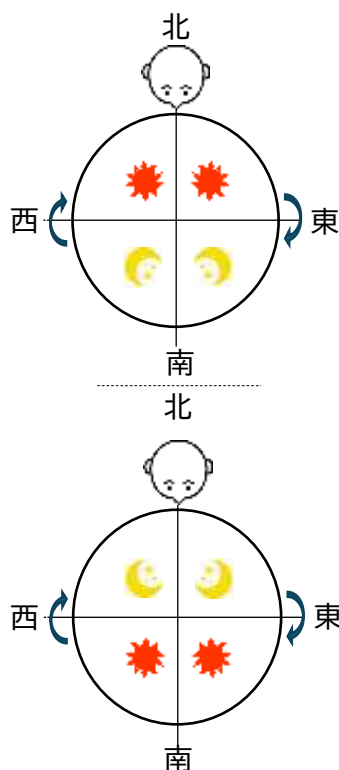
昔は東西軸重要視ということは、太陽出る東を背に西面す（為政者は太陽）であった。北を背に・北に座し（為政者は不動の北極星）南側を向いて座れば、太陽が昇る東面は皇帝から見て左側、太陽が沈む西面は皇帝から見て右側となることから、登る（左手の東方角）＝^{さじょう}左上（は陽）、沈む（右手の西方角）＝^{うげ}右下（は陰）の相待（対）関係が生まれた。生んだというのが正しいのだろう。

しかし、本来、東西南北の方角に優劣はないのだから、東西軸重要視と言っても東西に優劣はない、南北軸重要視と言っても南北に優劣はないのである、文明が開かれる過程において人間が「もの・こと」に意味付けを図る中で、意味分節を以って優劣の序列を付加・付与して来た、東西南北四方の統合の思想の反映でもあろう。

①



②



③

太陽は東から上って西に沈む、沈むとは籠るとも言える、その籠るとは今度は東へ上るための休息（翌日活動に備えてエネルギーを熟成すること）である。また、日中の太陽は夜には月に変化して夜を統べると言い換えられる。太一（太極）は北を背にして宇宙を見ているということは、消長循環（エネルギーの蓄蔵と放出）の統御・差配を担っているのだ、とも見做せる。

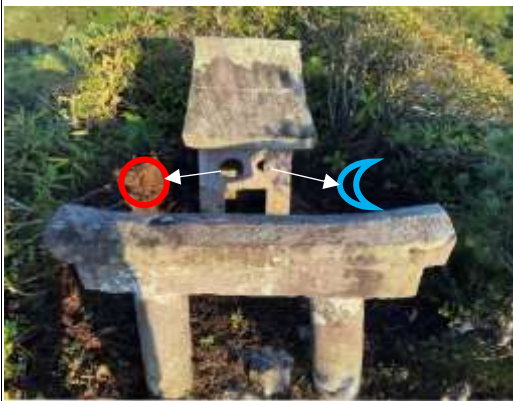
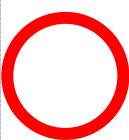
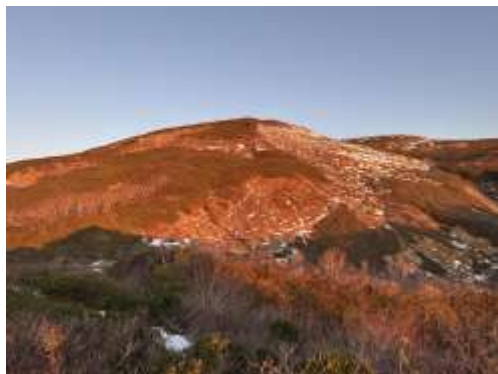
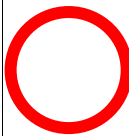
②の上下二つの意味合いは、太陽が出ている時は月は隠れ、月が出ている時は太陽が隠れているということを対象化したもの。あるいは、回転の動を重ねた静に等価転換したものともいえる。太陽は東から上って西に沈むことから、ジェンダー性では、種を運ぶ男を東に、その種を待ち受ける畑の女を西に配当している。②の上下二つの図柄を重ねてイメージすると、太陽は太陰に、逆に太陰は太陽に入れ替わるということは陰陽の重なり・交感交合に結び付いて行くことになる。

「日・月－太陽（日）と太陰（月）」の相対配置の基本、すなわち、「左上右下（左尊右卑）思想」を踏まえ、派生的・発展的な視点から、本域「清川 御所王子社」（五所皇子稻荷神社）石祠への日月彫り物を観察した場合、上記の基本形配置とは異なるので考察する。

手前に地上高約 55cm、幅約 100cm の寸詰まり鳥居があり、その先に日月のモチーフを彫刻した稲荷大明神の籠堂（石祠）が造立されている。この神社に額づいて拝むと、その視線の先、ほぼ西北西の延長線上に湯殿山が位置する。また、右手ほぼ北北西の先には月山が位置する。したがって、相対的には、左手方角に湯殿山が、右手方角には月山が位置することになっている。

言うまでもなく、信仰上の考え方においては、日は湯殿山、逆に湯殿山は日、月は月山、逆に月山は月に重ねられて来たことから、ここにおいては、人間の眼の左右位置と、湯殿山・月山の左右地理的位置が一致するように目の彫刻も合致させたのである。



		対象本体から見て		朝日に照らされた手盡坂バンドと影御所
		右	左	
	基本型			
	ここの現物			
	上弦の月		下弦の月	
形	右半分が光って見える半月		左半分が光って見える半月	
見え方	昼頃に東の空に昇り、夕方頃に南中し、真夜中に沈む		真夜中に東の空に昇り、明け方頃に南中し、昼頃に沈む	
特徴化				
象 徴	始まり		終わり	

この上下に善悪や
適・不適はなし

上記以外で「左上右下」思想（基本形）の“左右と阿吽”に見る具体例

西川町本道寺「口之宮湯殿山神社」仁王像／ご本尊から見て左に「阿」像、右に「吽」像の配置

「阿」は言葉発音の始まり、「吽」言葉発音の終わりを表すことから、
始まりはつまり「阿」を上位(左)、終わりはつまり「吽」を下位(右)と位置付ける配置



吾が町内会地区、熊野神社狛犬の配置／上の仁王像と同じ意味合いの配置



本件取上げの根幹意図

人間究極の精神安定は“調和”！ 左右・上下のいずれをも平等に是とし、その極に適不適は無し！

その両極の不離一体を以って「無極而太極」の真理を学ぶ『Study Field』

貴方がいて私、私がいて貴方、そこに何の軽重はあろうか、あろうはずはない！

両者は生まれた時から比較対象外なのだ！

こんな当たり前が血肉となれば熟睡完熟、これは可笑しいと思えば不眠弱睡

このような観点は、観念論に生まれずして、実学（実業而学問＝知行合一）で体得可也



新天皇が即位後、初めて行う新嘗祭は大嘗祭と称し、令和今上天皇に関連すれば、2019(令和元)年5月13日(月)、皇居・宮中三殿の神殿前で斎田^{さいでん}定点の儀が行われ、その時の式殿の配置である。(令和元)年12月4日(水)、「大嘗^{だいじようきめう}宮」が一般参観、公開されていることから皇居に行ってきた。今は、東西(左右)に軽重の差異は無いとするだろうが、天皇が北を背に南面すれば、左が太陽の出る東の上位、右が太陽の沈む西の下位となっている。



山形県西川町旧本道寺(真言宗) 門前集落の元宿坊「一明坊」に伝わる(所蔵の) 門外不出のものである。最下段に弘法大師自らが彫刻したと記述された「南無阿弥陀佛」の刷り物の掛け軸である。最上部左右に「日と月」を配している。

あらためて		
この4枚は1頁写真に採用した鶴岡市羽黒町菅原功さん撮影のものであるが、庄内平野の人達が毎日眺めつつ崇め奉る出羽三山（月山）並びの風景である。 月山を中央に、直接視認は出来ないが、どう見ても、向かって左奥に羽黒山を、向かって右奥に湯殿山を観想することになる。 したがって、出羽三山神社のHPの配置を見た時、“アレ？”と感じる人がいるかもしれない、私は違和感を直感した。なぜなのか、私は1968（昭和43）年4月1日高卒新入社員として入社したのが鶴岡市の事業所であり、その後に菅原さんお住いの野荒町にあった事務所に4年間勤め、毎日この配置を眺めていたからであり、結局は庄内に10年11か月居住したからであろう。		
	あえて、唯物論と唯心論を持ち出して遊ぶが、余り意味はなく、いずれにしても、出羽三山は両極（神仏、物心）両方の見方を包摂する大日本精神なのだ、これが結論！	
	観 点	唯心論
	基本立場	物質が根本的実在。意識・精神は物質の働き（脳の働き）の結果で生じる
	世界認識	世界は客観的に存在し、人間の精神に依存しない
	本 件	地理的配置
		唯心論
		心（精神・意識・理念）が根本的実在。物質世界は精神の表れ、ないし派生物
		世界は精神によって構成される、または、精神に依存して成立する
		左上右下

(end)